インフィニット・ドリーム～夢を守る少年～

津山正太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は神様の手違いで死んだ、、、だが！気にしていなかった

少年は人生をリスタートし、手にした力で気ままに過ごすのであった

目次

第零話　ゲームオーバーとコンティニュー？ ―――― 1
一話　リスタートそして入学？ ―― 4
二話　代表そしてコンバットオープン？ ―――― 8
三話　待機もしくはコンプリート 15
四話　怒りつまりオーバーキル ―― 26
五話　平穏もういちどパニック!? 36
六話　閑話休題とともにベストフレンド ―――― 43

第零話　ゲームオーバーとコンティニュー？

ーー???

ここはどこだろう、さっきまで歩いていた道ではなく辺り一帯が暗い。

そしてさっきから土下座をし続けているこの子は誰だろう？

「いったい君は誰なんだい？どうして僕はここにいるんだい？

そして、ここはどこなんだい？」

ピクリと震えた目の前の子が恐る恐る口を開いた

「私は神様です、あなたは私の不手際で誤って殺してしまいました、

つまりここは死後の世界です、、本当にごめんなさい」

「へぇ～そういうことかまぁいいよ」

「怒ってないのですか？」

「まぁ生き死ににあまり執着してないしね、誰かを庇って死んだから

むしろ嬉しいよ」

（そのかばった人間が悪党でもない限りネ）

みるみると少女の顔が明るくなっていきホッと息をはいて口を開いた

「では、あなたを別の世界に転生させてあげます、特典を付けて、
普通は一つなのですが、今回は特別に二つにさせてもらいます」
少年は難しい顔で悩み始め、少しの間をおき話始めた
「それじゃぁ、一つめの願いは『仮面ライダーファイズ』に出てきたギアを
全部作れる知識、そして二つめは『そこそこ強い身体』でお願いします」
「えっ?一つめはともかく二つめはそれでいいんですか?最強の肉体〜
とかじゃなくて」
「いいんですよ、最強って多分つまらないので」
少年は少し寂しげな悟ったような顔をしてそう答えた
「分かりました、でｈ「その前に。」、、なんでしょう?」
「僕はどこに転生するんだい?それだけがずっと疑問なんだ」
「インフィニットストラトスです、登場人物の一人そして二人めの男性操縦者
ということになります」
「そうかい、ありがとうこれで心おきなく行けるよ」
「では、二回目の人生お楽しみください」
その言葉と共に少年の足下がシュオッという音と共に無くなり
勢いよく少年は闇に落ちていったのだ

「ッ!?うぁぁぁぁぁぁぁぁ!?騙されたぁぁぁぁ!!」
精一杯の叫び声と共に少年の身体は何処かへ消えていき一人残った
少女は呟いた
「精々死なない程度に頑張ってください、、、フフッ♪」
闇のなかで落ち続けながら少年は考えていた
「やっぱり『ファイズ』から作るべきでしょうか、あえて『デルタ』というテも
あると思うのでs」
ヒュゥゥゥゥ、、、ゴンッ!!考えていたがゆえに迫っていた床に気づかなかった
ので、真っ逆さまに頭から激突した
「ッテェ!ん?なになに、この先転生の扉?こっちですか」
しばらく歩くと少し大きめの扉が見てきた、そこには『こちら、インフィニットスト
ラトスの世界』
とあった
「それじゃぁ、生きますかもう一回。人生リスタートです」
ガチャッ!ギィ、、バタン

一話　リスタートそして入学?

ーーー自宅

（僕の名前は『如月霧弥』ご存じの通り転生者で如月家の息子として生き始めたのです）

「霧弥ー、ご飯早くつくってーー」

「わかったよー、母さん」

（僕の家族は母さんだけ、父さんは僕が小さい時に事故で死んでしまったと

母さんは言っていた、そしてその母さんは技術者だ）

霧弥は手際よくご飯をよそり、漬け物を切るとそれをお皿の上にのせ

テーブルへと運んだ

「「いただきます」」

「うん、やっぱり美味しいねえ霧弥のご飯は自慢の息子だよ」

「ありがとう、てかそれ毎日言ってるよね」

そう言いながらも霧弥はどこか嬉しそうな顔でご飯を食べ続けた

（母さんは霧町社の技術開発長、ＩＳの開発に携わっている人たちのなかでも

トップの役職の人だ、そして僕の開発したＩＳと僕自身の秘密を知っている

唯一の人でもある）

少しの間二人とも静かになり、ほとんど同じタイミングで口を開いた

「あのさぁ、、「母さん先いいよ」、んんっ、霧弥今日受験だよね頑張りなさい」

「うん、やれるだけをやるよ。大丈夫、僕はできるから」

「で？霧弥は何て言おうとしたの？」

「ん？あぁ、いつもと同じだよ気を付けてねってだけ」

「ありがとう、でも本当によかったの？藍越学園で、霧弥にはアレを動かせるのに」

「いいんだ、僕は普通がいい」

諦めたような達観したような表情で言い、向かい合う母はどこか

含みのある表情で笑っていた

「どうしたの？母さん？」

「いいえ、何でもないのよ」

（どうしたんだろう？母さんがこうやって笑うときって大抵良いこと無いし

僕にとってマズイことが多いんだよね）

「「ごちそうさまでした」」

「片付けは僕がやっておくよ、いってらっしゃい」

「えぇ、行ってくるわ。気を付けてね、、いえ楽しみにしててね」

「?どういうこt「行ってきまーす」あぁ!もう」
「いったいどういうことだろう?まぁいいか僕も行こう」

ーーー藍越学園試験会場
「やぁ弾、調子はどうだい?勉強した?」
「おう!一応やって来たぜ、お前のお陰で藍越がなんとか受けられる位には
なれたからな」
「いいや、ここまで頑張れたのは君自身の力さ。さぁ行こう」
黒髪と赤毛の少年たちは揃って藍越学園の試験会場へと足を踏み込んだ
だが、たくさんの人・人・人のせいで別々の方向に流されていきました
「じゃぁあとでな〜〜がんばれよ〜〜」
「うん〜〜がんばってよ〜〜」

ーーー自宅
長いテストも終わり、弾と共に帰りテストが終わってからずっと同じことを
騒ぎ続けるテレビを見ていた
「なんと、男性初のＩＳ操縦者が発見されました!織斑一夏君です!なんとあの

ブリュンヒルデの弟であｒ「ここで速報です、霧町社が緊急会見を開いております
なんと、霧町社の技術トップ如月紗江氏の息子もＩＳを操縦できるとのことです!!」
「ブーーーーーッ!!!!え?!、、はぁそういうことか今朝のアレは」
〝ピピッ〟
「ん?・母さんだ、、なになに?『どう?・おもしろいでしょ、がんばれよ〜♪』って
ふざけてるのかあの人は、、、」
(これからは普通にじゃいられなくなるなぁ、どうしたものかなぁ?・まぁ
アレがあるからいいか、、てかＩＳ学園って女子しかいないんだよね
やだなぁ〜)
「これからどうなるんだろう」

二話　代表そしてコンバットオープン?

ーーーＩＳ学園

私自身はゆっくり普通に過ごしたいのだが、やはりそうはさせてくれないようだ

騒がしく私たちの周りを女子達が囲んでいる、それは僕たちが世界初の

男性操縦者だからなのだろうな

〝キーンコーンカーンコーン　ガラガラガラ〟

「はい～それでは座ってください、ＨＲをはじめますよ～

私の名前は山田真耶です、一年一組の副担任をすることになりました～」

（見た目はともかく雰囲気からは悪い感じはしないな～）

「では、自己紹介をしていってください」

自己紹介が進んでいく、あっ彼が織斑君か

「織斑一夏です、、、以上です！」

〝スパァーーーン!!〟

「いってぇ！なんなんｄ「貴様はまともに自己紹介もできないのか」、、

千冬姉！」

〝スパァーーーン!!!〟
「学校では織斑先生と呼べ」
（あれ、体罰じゃないのかなぁ？）
「貴様らを一年間指導することになった織斑千冬だ、一年で
貴様らを使えるようにするのが私の仕事だ、私の言うことにはすべてＹＥＳか
ハイで答えろいいな！」
「「「「キャァァァーーーーーーーーーーー!!!」」」」
衝撃だった、耳が壊れるとはまさにこの事だと初めて知った
よく見るととなりの席の子も耳を押さえている
「千冬様～～!!」
「強く叱って～そして優しく励まして～！」
「もっと罵って～～～！」
（女の子って分からないなぁ～）
「で、、では自己紹介の続きを、、」
おっと僕の番か、しっかり自己紹介しないとな
「如月霧弥です、至らない所は多いかもしれないですが
よろしくお願いします」

順調に自己紹介は進んでいき、授業は終わり休み時間となった
「ねぇねぇ～～きりきり～～」
「きりきり、僕のことかい?」
「そう、きりやだからきりきり～～、私は布仏本音よろしくね～～」
「あぁよろしく、ん～うん、のほほんさん」
「いいねぇ～気に入ったよ～～」
どうやら嬉しかったようだ、この子は女尊男卑に染まってないようだ
〝キーンコーンカーンコーン〟
どうやら二時間目がはじまったようだ、普通の授業となるはずなので
しっかりやらなくてはいけないな
「そうだ、そういえばクラス代表を決めていなかったな自薦他薦は問わない
誰かいるか?」
「織斑君がいいと思いまーす」
「わたしも織斑君がいいー」
「如月君もいいと思います」
「さんせーい」
「では、織斑か如月のどちらかｎ「待ってください!」、なんだ」

「わたくしはこのような二人にクラス代表などやらせるわけにはいきません
男性操縦者などに任せて万が一負けたら学園中のはじになりますわ
だからこそ、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットがつとめるべきです」
「オルコットさん、僕はともかく織斑君にまでそんな言い方無いと思うよ」
「お黙りなさい！そもそも極東のサルであるあなた方と共に居るだけで
嫌だというのになぜ指図を受けないといけないのでしょうか!?
あなたのような軟弱な人は家族だって媚びへつらっているのではないの
ですk 〝バキィッ!!〟 、 へ？」
気がつけば自分自身の机を半分ほど握りつぶした状態で立ち上がっていた
全くの無意識だったし人生で怒ったことなどただの一度もないが今だけは
果てしない怒りが沸き上がってくる
「ねぇ、、 発言には気を付けた方がいいよイギリス代表さん、
あなたの発言はイギリスの発言となるから今のあなたは言葉は
僕に霧町社にひいては日本に対する挑戦状として受け取られるよ」
「そ、、 そんなこと、、」
〝パンパン!〟
「そこまでだ、それではこうしようクラス代表をかけて模擬戦を

してもらう、山田先生アリーナが空いているのはいつだ?」
「七日後ですね」
「そうか、では七日後に模擬戦をしてもらおう!織斑も如月も
それでいいな?」
「俺はいいですよ～」
「僕も大丈夫です」
かくして、七日後にクラス代表決定戦をすることになりその準備に
追われることとなった
ーーー放課後　教室
「如月さん、これがあなたの部屋の鍵です」
チャリンッという心地よい音と共に山田先生から手渡されたのは
寮住まいの僕にとって一番大切なものである『自室の鍵』
「部屋番号は０９１３なので、間違えたりくれぐれも
無くさないようにしてくださいね」
「わかりました、わざわざありがとうございます」
「いえいえこれも教師の勤め、でもあまり起こらない方が
いいですよ」

「？何故です？」
「如月さんの威圧と剣幕に怯えてしまった子もいるので」
それは不味いことをしてしまった、いくら怒ったことがないから
とはいえ周りを怯えさせてもいいことにはならない
「出来る限り、気を付けます」
そう言い残し僕は早速自室へと向かった
「荷物は部屋に送ってあるので～～」
ーーー学生寮　０９１３室
〝コンコン〟返事がない恐らく誰もいないのだろう、早速入ろう
入ってみると想像していたよりも広くまたきれいだった
そんな中で早速自分の荷物を見つけたので荷物を開くことにした
「ん？これは、、
『ＩＳ学園に入ったならなにかと必要でしょ存分に使ってちょうだい　母より』
、、こういうところはありがたいんだよなぁ、まぁ
使うとするか」
箱の中に入っている携帯のようなものをとりだしもう一つのベルトを
装着した

〝ピッピッ！ピッ!!　Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ〟

「変身!!」

〝Ｃｏｍｐｌｅｔｅ〟

携帯のようなものに５５５と打ち込み『Ｅｎｔｅｒ』を押して

ベルトに差し込んだ、すると途端に体に赤いラインが通り

少年はパワードスーツのようなものに体を包まれた

「え?なに、、それ、、、?」

「きっ、、、君は?」

三話　待機もしくはコンプリート

ーーー同時９１３室　簪側

「はぁ」

私は更識簪、この学園の一年生で現生徒会長の妹という立場にある、親友の本音とは別のクラスになるし知り合いいないしで最悪の気分で自室に向かっていると目指していた自室から音が聞こえた

（もう誰かいるのかなぁ？仲良くなれるといいな、）

「、、変身！」

自分の大好きなヒーローがいつも叫んでいるセリフが聞こえてきたので急いで自室のドアへと駆け寄りその先にいる人物へ声をかけた

「え？なに、それ、、？」

だがそこで見た光景があまりにも現実離れしていたのでそんな声しか出すことができなかった

ーーー９１３室　霧弥側

見られてしまった、ＩＳ状態ならまだしもＭＳ（マスクドライダー）状態を

見られた、とりあえずコンタクトをとってみよう
「つかぬことを伺うけど、どこから見ていたの？」
「その見た目になってから、、だけど」
どうやら向こうも動揺しているらしくいきなり叫んだりはしないようだ
でも、こちらを警戒しているようで視線が怖い
「ちょっとごめんね、部屋に入ってもらえる？」
「う、、うん、、」
〝カション　ピッ〟
ベルトから携帯を引き抜き携帯の通話終了ボタンを押すと変身時の
逆再生のようになり、少年の素顔が明らかになった
「え、、男？じゃああなたが二番目の男性操縦者なの？」
「そうだね、如月霧弥ですよろしく」
「、、あっ、更識簪ですよろしく」
一応握手をし、自己紹介も済ませたので僕は早速本題にはいる
「今更識さんが見たものは絶対に誰にも言わないでくれるかな？」
「、、、いいよ」
少し不満そうに答えてくれた

「ありがとう、、で、どうしてそんなに目を輝かせているんだい？」
その通り、会話中もずっとぼくのファイズギアを本人は気付いていないようだが凝視していた
「ひゃっ！そ、そんなことないよ」
「もしかして、ヒーローとか、好きなの？」
そう問いかけると更識さんは顔を赤くして俯きながら蚊の鳴くような声で答えた
「うぅ、、みんなにはからかわれるけど、特撮ヒーローが大好きなの、、」
「いいねぇ、僕も好きだよヒーロー」
「本当！冷やかしじゃないよね、、」
「当たり前さ、じゃなかったら『変身！』なんて言わないよ？」
そう言うと更識さんは明らかに嬉しそうな顔をした、花が開いたような綺麗な表情だった
（この子になら他の『ギア』をあげられるんじゃないかな？）
その後も遅くまで色々な話で盛り上がり、その中で簪と呼んでいいということお姉さんがいて些細な衝突からケンカをしてしまい仲直りできていないということを聞いた
（簪の力になってあげられないかな？）

ーーー翌日　朝　食堂

「今日の朝御飯はどうしようかな？」

「私はＡランチにする」

昨日話したお陰で簪と仲良くなることができこうやって一緒に食事をすることになった、だが時折簪は少し暗い表情をすることがある

「霧弥って結構早起きなんだね」

「母さんが家事ができない人だったからね、自然と早起きして色々していたからね」

「あいせきい～～い？」

「あっ本音！いいよこっちこっち」

「あ～きりきり～おはよ～、なんでかんちゃんと一緒なの～？」

まぁごもっともな質問だね男子と同室なんて誰にも言ってないだろうからねぇ

「簪とは同室なんだ、この学園のことをかなり教えてもらったんだよ」

「逆になんで本音と霧弥が知り合いなの？」

こちらもまたごもっともな質問です、いちいちとなりの席の人を

教えたりしないもんね
「のほほんさんとはクラスでとなりの席なんだ」
「へぇ～そうだったんだ、、、ってのほほんさん？」
「いつもぽや～んとしてるからのほほんさんだよ」
「、、なんだろうすっごく合ってる気がする」
そうかなぁ？いつもの様子を見ていればすぐに出てくると思うけどなぁ
もう時間がないな早く食べて教室に行かないと
ーーー昼　食堂
「はぁ、、疲れた」
本当に疲れた、自分の持っているＩＳの知識を変に披露しないように
気を使うからなんだろうけど
「どうしたの霧弥？疲れてるみたいだけど」
「きりきりはね～実はすっごい頭が良いんだよ～
本人はすっごい隠したいみたいだけど～」
「当たり前だよ、そんなにアピールがしたいわけでもなければ
目立ちたいわけでもないからね」
本当だ、目立ちたいわけでもないのに目立つことになって

いつの間にか代表候補生と戦うことにっちゃったし
「きりきりはね～怒るとすっごい怖いけど、でもかっこいい怖さだったんだよ～」
「かっこいい怖さ？どういうこと？」
「きりきりの目の奥に～鋭い何かがあったんだよ～」
「何かって？」
「わからないよ～でも凄みが違かったよ～」
ヒソヒソと簪達が話をしているが僕は構わず食べるそして食べ終わり
簪達の食べているところを見ているのが楽しい
すると、恐らく上級生であろう人たちが三人こっちに来た
「ちょっと良いかしら～？」
「あなたが二番目の男の操縦者よね～？」
「お姉さん達が教えてあげようか？」
やはり来たか、僕は自分がＩＳを動かせることをずっと知っていた
だからそのために訓練もしてきた今更教えてもらうこともない
と思う
「失礼ですが、先輩方の搭乗時間はいくつですか？」

「３００時間よ、私が一番ながいわ」
「すみませんが、最低でもその１０倍はこなしてきてからお願いします」
「なっ、、あなた何を偉そうに！」
「僕は霧町社の所属だから軽く２０００時間は搭乗時間が
ある、それを越えている人じゃないと教えてもらえる気がしない」
「くっ、、、さ、、さようなら！」
あーあやってしまった、あんなに強く言わなくてもよかったのに
僕はだめだなぁついどうしても強く言い過ぎちゃう
「あら？本音、簪様、そちらの方はどちら様ですか？」
そんなとき大人びた声と共に背の高い女の人がやってきた
「あ～お姉ちゃん～」
「どうも、虚さん久しぶりです」
「？二人ともこの人どちら様？」
「え～っと、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ～」
「えっ！嘘！本当？！」
「そうだよ、全然雰囲気も見た目も似てないけど二人は
姉妹なんだよ」

「へぇ～ここまで似てないのもはじめて見たかも」
本当だ全然似てない、本音はどこか抜けているがお姉さんの方は見るからに
真面目でしっかりしている
「はじめまして布仏虚です、いつも妹がお世話になってます」
「いえいえ、僕もお世話になってますよ、あぁ如月霧弥です
霧弥でいいです」
「では私も、虚でいいですよ」
「わかりました」
その後もギリギリまで話をして、二人のしらなかったことまで
虚さんは教えてくれた、だけど別れ際に
「いくら同室とはいえ、簪様に変な真似はしない方がいいですよ
命が惜しければ」
って言ってた意味はなんなんだろう？
ーーークラス代表決定戦前日　格納庫
「ふぅ」
山田先生の書類やデータの手伝いをしていたら遅くなってしまった
簪はもう寝ているかな？人使いが荒いわけではないが、大変だったなぁ

「？」
そこでふと横を見るともう人が居ないはずの格納庫から光が漏れていた
気になったので近づいてみるとブツブツとモニターと作りかけのＩＳ？
に向かって何かしている簪が居た
「何をしているの？」
「！、、霧弥かぁおどかさないでよ」
「これ、、、どうしたの？」
「これは私が乗るはずだった専用機『打鉄弐式』、、だけど倉持技研が
世界初のＩＳ操縦者の専用機を作ることになったお陰で私のこの子は
開発中止になった、、、だから私は織斑一夏が嫌い」
「織斑君が嫌いとかは置いといて、これ何処まで出来てるの？」
「半分くらい、、、かな？」
「なら、霧町社が簪のＩＳを完成させよう、一つの仕事をやり遂げられない
倉持技研に代わって」
「そんな情けは要らない!!この子は私がお姉ちゃんを越えるために
絶対一人で作らなきゃいけないんだ！」
「一人で無理をして、それでほんとに越えたって言えるのかな？」

「わからないよ!!でも、やらなきゃいけないんだ」
「一人でやることは確かにすごい」
「なら何で、、」
「でも、人を頼り何かを共に成し遂げることの方がもっと
　凄い、他人を頼るのって相当な勇気がいるからさ」
「じゃあ霧弥は誰かを頼ったの?」
「あぁ、初めて会った時のアレだって母さんに協力してもらって
　作り上げられたんだ、誰かを頼ることは悪いことじゃない」
「私には、、、まだ分からない、、、」
　そう言って簪は走っていってしまった、追いかけても良いことは
　なさそうだ、明日全てを見せてあげよう、、それで証明する
　ーーークラス代表決定戦　朝
　今日はクラス代表決定戦、面子とかプライドのために戦うんじゃなく
　たった一言を訂正させるために戦う
「Aピットはここか、ん?」
　そこには目を少し赤くした簪が居た、そういえば昨日布団の中で
　少し泣いていたな

「どうしたんだい？」
「霧弥の戦う姿をここから見たい、何か分かるかもしれないから」
〝では、第一試合を行います　セシリア・オルコット選手如月霧弥選手
アリーナへ入ってください〟
「もう入っていますわ」
相手はもう準備万端のようだ、早く行かなくてはな
「じゃあ簪、見ててよ僕の、、、
〝Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ〟、、変身!!〝Ｃｏｍｐｌｅｔｅ〟」
そう叫び赤い光に包まれた僕はまばたきひとつする間に
ＩＳを身に纏っていた
「如月霧弥『コードファイズ』いきますっ!!」
赤い光の残像を残しながら大空へと僕は飛び立った

四話　怒りつまりオーバーキル

ーーーアリーナ　セシリア側

ついに来ましたわ、私のことをさんざんこけにした男が

男なんてみんな女に媚びることしかできない軟弱な生物だということを

この戦いで証明してやりますわ

ーーーアリーナ

本当はもっと隠しておくつもりだった、専用機があるというのは

秘密裏に自分の危険を避けるためだけに使おうと思っていたが

そうはいかないようだ

「なんなんですのそのＩＳは？」

「さっき言っただろう、これは『コードファイズ』、僕の専用機だよ」

「そのような機体はどこの企業を見てもなかったはずですわ」

「それはそうだよ、これは僕と母さんの秘密の機体なんだから」

「っ、いいですわ！あなたが負けたらわたくしへの謝罪してもらうのと

この学園から去っていただきますわ」

「じゃあオルコットさんが負けたら僕の家族に対する発言を取り消してもらうよ」
「いいですわ」
機体の調子は上々、これならやれる
〝それでは、、、試合開始!!〟
「ブルーティアーズ!」
試合開始早々オルコットさんの周りを浮遊していたビットが
僕に向かって射撃を開始した
「それが噂のＢＴ兵器か!だけどそれだけじゃ!」
ヒュン!シュン!次々と打ち出されるレーザーを軽やかにかわしていく
オルコットさんは一向に当たらないことに腹をたてているようだ
「それじゃあ、こっちからもいかせてもらうよ!」
〝Ｒｅａｄｙ〟
霧弥の持っている灰色の剣にメモリのようなものが差し込まれると
音が鳴り刀身がボディと同じように赤く光だした
「悪いけど、幕引きだよ!」
〝Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ〟
腰の部分にある携帯を開き『Ｅｎｔｅｒ』を押すと音声と共に

ベルト部分から赤い電のようなものが霧弥の持っている
剣へと流れていって刀身がより赤く輝きだした
「スパークルッ・カットォォォォ!!」
そう叫び放った一撃は一直線にブルーティアーズに吸い込まれていき
ブルーティアーズは爆発を起こした、一瞬の静寂の後爆煙の中から
出てきたのは半壊したブルーティアーズだった
〝ブーーーッ!!　試合終了!勝者、如月霧弥!〟
「「「ワァァァァァ!!!!」」」
「ふぃー、終わった、、、」
〝ジジッ〟
どうしたことかプライベートチャンネルに通信が入った
相手はオルコットさんだ、どうしたのだろう?
「よろしいでしょうか?」
「うん、構わないよ」
「謝罪はのちほどさせていただきます、それとわたくしの完敗
ですわ、、、でもわたくしにとって良い試合でした」
どうやら差別も女尊男卑の考え方もきれいに吹っ切れたようだ

これまでとは違って良い表情をしている
「もう一試合あるのですが、、これでは棄権せざるをえないですね」
「ごめんね、やり過ぎたかも、、」
「いいのですよー、、あなたのお陰でわたくしの考え方を
変えられたので」
次は織斑君だ、このままここにいて出てくるのを待とう
〝第二試合は織斑選手対オルコット選手の予定でしたが
オルコット選手の機体コンディションとの兼ね合いで
棄権となりました、よって一試合繰り上げて
織斑一夏選手対如月霧弥選手の試合となります〟
おお、すぐ出てきた〝ピピッ〟、ん?織斑君からのプライベートチャンネル
一応簪にも一方通行で繋いでおくか、、
「なんだい?」
「試合の前に言っておきたいことがあるんだけどよぉ」
「?手短にね」
「お前二番目に見つかっただけでちやほやされてんじゃねぇぞ!
俺は織斑千冬の弟で天才だから当たり前だけどお前がもてはやされる理由はねぇ

俺に負けたらこの学園を去ってもらうぜ、それとお前のつるんでる
女たちもみんな俺のものだ！」
「、、、簪たちと話したいなら自分からいけばいいのに」
「はぁ？俺は天才だぞ、他人のものを奪って何が悪い？」
「、、、試合を始めよう」
「いいぜぇ、、お前をとっとと追い出してやる！」
一方通行で簪にこの会話だけを聞かせていた、悲しんでいるか悔しがっているか
ここからでは表情が見えないでも、、、大切な人を馬鹿にされたのは
許せない!!
〝それでは、、、試合開始!!〟
「いくぜぇぇぇ!!」
開始早々急加速でこっちに突っ込んできた、だが動きが直線的すぎる
なので軽々とかわせた
「この動きで天才？笑わせないでくれるかな！」
〝Ｒｅａｄｙ〟
ギンッ！ガンッ！ゴンッ！さっきの試合よりも一太刀一太刀が
重く鋭くなっている

「くそッ！せめて一次移行ができれば！」
どうやらまだ一次移行していないようだ、ここは一時離脱して
一次移行するのを待つか
「どうしたァ！臆病者が!!」
そのとき織斑君の機体が光だした、どうやら一次移行は完了
したようだ、これでもう倒してもいいだろう
「ようやく一次移行したところ悪いけど、終わらせてもらうよ」
〝Ｒｅａｄｙ〟
ガシャンッ！その音と共に僕の機体の右脚部分が開き中から赤い
電柱のような太い棒が出てきた
「な、、なんなんだよそれ!!」
〝Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ〟
君に答える義理はない、そう思い無言を貫いていると腹が立ったのか
まっすぐこちらに突っ込んできた
「、、、クリムゾン！スマッシュ!!」
まっすぐ突っ込んできた彼にこちらも右脚を突き立てるようにして
まっすぐ急降下した、こちらの右脚が彼の腹に当たり彼は地面まで

吹き飛んだ
〝ブーーッ!!試合終了!勝者、如月霧弥!!〟
「「「「ワァァァァ!!!」」」」
「終わったかな、ピットに戻ろう」
ーーー霧弥側ピット
「ただいま、ってどうしたの?」
「霧弥も私たちのこと物としか見てなかったの?」
「そんなわけないだろ!、、、大切な人が馬鹿にされてそう思えるか?」
「ごめん、、なさい、」
「いいんだ、ただいま」
「うん!お帰り、、」
そう言って涙を流す簪と抱き合い少しの間慰め続けた、だがすぐに誰かが来たようなので僕たちは離れた
「やっほ〜〜きりきり〜おめでと〜」
「あぁ、ありがとうのほほんさん」
「すごいね〜〜あの必殺技〜〜」
ドカドカドカ、荒い足音が遠くからこちらに近づいてくる

予想していた通り織斑千冬、、と誰だろう?
「、、きりきり～篠ノ之箒だよ～～、いつも織斑について回ってる～」
僕が知らない、ということに気づいたのかこっそり横から教えてくれた
「貴様ァ!さっきのＩＳの威力はなんだ!あんなものルール違反だろう!」
「そもそもこの模擬戦にルールなんて無いですよ」
「それにしても、貴様のＩＳはスペックが高すぎる、よってこちらで
回収させてもらう、異論は認めん」
「そんなこと!一教師の判断でしていいんですか!?」
矢継ぎ早に繰り出される文句と命令についていけなかった僕の代わりに
簪が反論してくれた
〝ピッポッパッポッ、、「はいはーい、なに～霧弥?」〟
「貴様!誰に電話している?」
「母さんですよ、僕は霧町社の所属だということを証明するんです」
そういってスピーカーをオンにして会話を始めた
「霧弥はね～うちの所属で間違いないよ～」
「だが!彼のＩＳは強すぎる!」
「仕方ないよ、霧弥は通常のＩＳ搭乗時間が１８０００時間超えてるし

特殊搭乗時間でも４０００時間は越えてるから～」
「なっそんなのあり得ない！、、そうだ！彼のＩＳをこちらに引き渡してもらおう」
「それはできないな～だって霧弥のＩＳにはブラックボックスとトップシークレットでいっぱいだから～」
「で、では、、」
「私も暇じゃないからさぁ～ここらでさよならだよ～じゃあね～霧弥～」
「ありがとう母さん」
〝プツッ〟
「クソッー！」
電話を切ると件の二人はそう言い残し僕たちのいるピットから去っていった
「きりきりも大変だね～」
「そうだね」
（私のことを大切って言ってくれた思っていてくれた、、何だろうこのドキドキした気持ちは？）
「どうしたの簪？もう行くよ？」

「ハッ！うん、いこう」
どこかボーッとした表情で答えた簪はそそくさと僕の後ろを付いてきた
ーーー放課後　シャワールーム　セシリア側
あの試合が終わってからわたくしの考えは１８０度変わった、もう二度と
他人を馬鹿にしないと考えさせられた、、でもそれより
あの方のことを考えると胸の奥が熱くなる
「これはいったいなんなんですの、、」

五話　平穏もういちどパニック!?

ーーー翌日　夕方　食堂
「「「「「かんぱーい!!!!」」」」」
乾杯、僕たちがどうしてこうしているかと言うと話は約２４時前に遡る
ーーー昨日　夕方　０９１３室
「え？祝賀会？誰の？」
「霧弥のに決まってるでしょ、クラス代表の就任祝い」
そうか、僕はクラス代表決定戦で勝って代表になることにしたんだっけ
若干１名だけはこの結果が不服だったみたいだけど
「そうなんだ、じゃあいつやるの？」
「明日の夕方頃って言ってたかな」
「じゃあ遅れないように行こうかな、場所は？」
「食堂だよ、必ず来てね」
「わかってるよ、簪」
ーーー現在　夕方　食堂

そうして今に至る、というわけか
「霧弥くんほんとに強かったね～」
「ほんとほんと～かっこよかったよ～」
「うん、ありがとう」
どうやら織斑君と織斑先生それと篠ノ之さん?も来てないみたいだな
それもそうか、あんなことあったんじゃこれないよな～
「すみませーん! 新聞部の黛でーす、如月君取材いいかな?」
「ええ、どうぞ、よろしくお願いします」
取材かぁ、これまで自分のことを隠してきたからな～受けたことも
お願いされたこともなかったな～
「それじゃあ単刀直入に、、如月君のＩＳについてお願いします」
「う～ん、、正直言えないことの方が多いですけど、唯一言うなら
僕のＩＳはもっと強くなるってことですかね」
「なんと! まだ成長の余地を残しているんですか?」
そうだね、まだ誰にも見せていない強化フォームがあるから成長と言えば
成長だな
「取材はこれで終わりです、最後に写真を撮らせてもらっていいですか?」

「いいですよ、楽しそうなので集合写真でお願いします」
「お任せください、綺麗にとってあげますよ」
「みなさーん！３１５，９１３引く３１５，９１１は？」
「「「にぃーーーーーー!!」」」
いい思い出になったな、最初はどうなるかと思ったけど信頼できる人や良い仲間に出会えたから結果的には良かったってことなんだろうな
ーーー夜　ＩＳ学園正面玄関　???側
「ついに来たわよ、ＩＳ学園！さぁ待ってなさい私が倒してあげるんだから！
っていうか事務室どこ!?ここ広すぎるんだけど～！」
やっと来ることができたわ、自分の目標のためここまで来たんだから絶対にアイツを倒して見せるわ！
「も～!!ここどこなのよ～～!?」
ーーー同刻　０９１３室
「ふぅ、、、」
楽しいからって少し騒ぎすぎてしまったようだな、どうにもまだ気分が高揚しっぱなしな気がする、何かこう一息つきたいな
「はい、霧弥」

そんなことを考えていると後ろからカップを持った手が差しのべられた
当然簪だ、すごい気が利くな
「ありがとう、やっぱり簪は気が利くね」
「／／／あり、、がとう」
どうしてそんなに顔を真っ赤にして俯いているんだろう?まぁいいか
本題に入ろうかな
「ねぇ簪?明日って暇かい?」
「ふぇ!?、、明日?うん何もないよ、どうして?」
「一緒に出掛けないかい?僕の行かなきゃいけないところをまわるだけだけど
それでもいいなr「いく!!」、、わかった、じゃあ明日の9時に正面玄関
に集合で」
「うん、わかった!」
ーーー同刻　０９１３室　簪側
「一緒に出掛けないかい?」
来た!どこに行こうと何をしようと私は平気、ただただ一緒に行きたい
もうそれしかない
「いく!!」

「じゃあ明日の９時に正面玄関に集合で」
「うん、わかった！」
ふふっ♪楽しみだな～霧弥と二人で出掛けるの、どこに行くんだろうな？
楽しみだな～
ーーー翌日　ＩＳ学園正面玄関
「早く来すぎてしまったのかな？」
時間は８時３０分予定の３０分前だ、いつも早め早めの行動を心がけていたのが
ここでもでてしまうなんて
「気を使わせちゃうかな？」
「おはよう、霧弥」
「あぁ、おはよう。ずいぶん早いね」
「霧弥こそ人のこと言える？」
「それもそうだね、ってそれにしても、、」
そう時間の早いだ遅いだなんかどうでもよくなってしまうほどのソレは
ほんの数分前に会ったときから頭のなかを支配している
「、、すごく、綺麗だね」
「／／／そんなっ、こと、、ないよ、、」

?.まただ、どうしてそんなに顔を真っ赤にして俯いてしまうんだろう
僕にはよくわからないけどまぁいいか
「それじゃあちょっと早いけど行こうか」
「うん！」
ーーー同刻　???　???側
「キィィィ!!あの男！簪ちゃんとずっと一緒にいて～!!
う、羨ましいいいいい!!!」
「シッ！ばれてしまいますよ、もっと隠密行動をとってください」
「そうだったわね、気を付けないと」
そうよ、簪ちゃんのためあの男のことを徹底的に探って簪ちゃんを
救ってあげるんだから！
ーーー9時　電車内
「空いてるね」
「空いてるね、まさかここまでとはね」
いくら今日が休日とはいえ朝だ、それにしては空きすぎてる?
あまりこういったものは使わないから正直よくわからないな
「霧弥、今日どこ行くの?.行かなきゃいけないところって言ってたけど」

「そうだね、まずはうちの会社に行こうか」
「うちの会社って、、霧町社!?」
「?前に言っただろう、僕の母さんがあそこに勤めてるんだ」
「そういえば、そうだったね」
　あんな強烈でヤバい人、早々忘れないと思うけどな～
　何かこう、忘れられないというか頭にこびりつくというか
「霧弥着いたみたいだよ、いこう!」
「早いね、いこうか」

六話　閑話休題とともにベストフレンド

ーーー霧町社正面玄関　簪側

「わぁ、ここが霧弥のお母さんが勤めてる会社なの？」

すごい大きい、それしか感想が出てこないくらいに大きい。もしかしたら東京Ｏワーぐらいあるんじゃないかな？

「大きいだけだよ、内容はあんまりないさ」

「そんなことはないと思う、だって霧弥はここであの力と優しさをてにいれたんでしょ？」

ーーー霧町社正面玄関

「大きいだけだよ」

「そんなことはないと思う」

こんな大きくなくていい、大きな隠れ蓑があった方が僕らがいろんな事をやり易いから大きいだけだから

「それにしても、簪はよくそんな恥ずかしいことを真顔で言えるね」

「、？そうかな？」

そうだよ、声には出さなかったけど僕は笑顔で肯定した
「さぁ行こうか」
「あっ！ちょっとまってよー！」
ーーー霧町社５号館
〝ウィーン　ウィーン　ウィーン、、チンッ〟
「やっとついた、簪ここが僕の用事さ」
「え、、なにここ？ＩＳがある」
「そうＩＳを研究しているんだよ、しかも既存のどのＩＳとも
同じではないｍ」
「全く新しい型のＩＳを造っているのだよ！」
「、、人の台詞を横から取らないでもらえます？母さん」
「この、、人が、、霧弥のお母さん？」
絶句するのも無理はない、こんな強烈な人初見だと絶対に引かれるか
間違われるかのどっちかだ
「そうよ～あなたが簪ちゃんね～、聞いてた通りいい子そうね～」
この人は、、全くのんきなんだから、人の気も知らないで
「如月さん、あの、、いつも霧弥にお世話になってます！」

「そんな気張らなくていいわよ～、うちの霧弥くんもいつもお世話になってるわ～」
「いえいえそんな、私なんてまだ全然、、」
「んんッ！そんなことより今日は簪に伝えたいことと渡したいものがあって付き合ってもらったんだ」
「なに？どうしたの？」
「それは私から言わせてもらうわね、まず簪ちゃんには霧町社の所属になってもらいます、それと新たなＩＳを託したいと思います」
「うそ、でしょ？わたしにＩＳをくれるの？」
「えぇ♪仕事を途中で放り出さないといけないような会社に簪ちゃんは任せておけません」
「さぁ簪、これを見てこれが新しい機体だよ」
「これって、打鉄？」
「おしいなぁ～正式名称は『打鉄弐式デルタ』って言うのよ」
そう、これが簪に託そうと思った機体僕の機体がファイズをモチーフにしているのに対しこちらは名前にもある通りデルタがモチーフだ
「母さん、正式名称は知らなくて当然だと思うよ」

「まあそっか、はてさて、気を取り直してこれが簪ちゃんの機体よ！
　存分に使ってね！」
「いいん、ですか？私なんかが乗っても」
「簪、でも、とかだって、とかなんか、とかもう言わないで
　そうやって言い続けた道はいつか行き止まるから」
「うん、私乗るよ！これに乗る！そしてお姉ちゃんを越えるんだ！」
「いいわね～青春ね～思う存分やってちょうだい、簪ちゃん強いんだから」
「早速乗ってみていいですか？」
「ごめんなさいね～まだ最終調整が終わってないのよ～休み明けには
　終わらせるから～待っててね～」
「ありがとうございます！待ってます！」
「それじゃあ行こうか？」
「えぇ～霧弥もういっちゃうの～？」
「元々用事はこれだけだったんだ、もう一件行きたいところあるし
　もう行かないとね」
「わかったわ～じゃあまたね～」
「またね」

ーーー霧町社正面玄関

終わった、ちょっと顔だしただけなのに何でこんなに疲れてるんだ？

まぁ簪は喜んでくれたみたいだし良かったかな、っと次はあそこかな

「ねぇ霧弥、次はどこにいくの？」

「僕の親友の家だよ、ココ最近会えてなかったからね」

そう、一番の親友である彼のいえだ

ーーー五反田食堂

「こんにちわー！おじゃましまーす」

「お、おじゃまします、、」

「おう！いっぱい食ってきな！」

この感じだ、懐かしい中学の頃何度も何度も味わった楽しい空気

今の生活ではあまりない感じだな

「おぁあ！霧弥！いつ来てたんだ！いきなりテレビに出てるし

最近連絡なかったし心配したんだぜ！」

「ごめんね弾、いろいろあって忙しかったし大変だったから」

「こん、にちわ、、」

「ん？んん？おい、霧弥、この子は？どしたんだ？」

「向こうの寮で同室の簪、いろいろお世話になってるんだ」
「そっか、友達できたんだなよかったじゃねえか」
　本当に良かった、心細い一人じゃないんだと思うといくらか楽になる
　弾と別れた後僕は再び親友を手にいれたと思う
「俺は五反田弾だ、よろしくな」
「はい、、よろしくお願いします」
「そんな固くならなくて良いよ、弾だし」
「どうゆうことだコラ?またヤるか?」
「おっとそんなつもりはないよ、今日は久々に顔を出しに
　来ただけだから」
「そっか、もっとゆっくりしてけばいいのにな」
「あの!どうして五反田さんと霧弥は別の道を歩んでるの?」
「あーっとそれはな、簪さん?
　同じ志をもって同じ道を歩むものを仲間と言いうんだ
　それで、同じ志をもって違う道を歩むものを親友って言うんだ」
「それで、いいんですか?」
「ああ、これで良いんだ」

「じゃあね弾、また今度来るよ」
「おう待ってるぜ、いつでもきな」
「じゃあ簪、行こうか」
「うん、わかった」
「「お邪魔しました」」
ーーーIS学園　0913号室
「どうだった？簪、かなり急なスケジュールだったけど」
「ううん、そんなことないよすごい楽しかったし、それに、、
嬉しかった」
僕からしてみればアレを用意するくらい造作もないことだけど
喜んでくれただけでなんだか他のことがどうでもよくなってきたよ
ーーーIS学園　???
「結局、ずっと後をつけたけど怪しいところはなかったわね」
「そうですね、周囲への警戒や身のこなしどれをとっても
一流レベルです」
いったい彼の目的は何なの？簪ちゃんに害をなすようなら

絶対容赦はしないわよ、